青陵
第164号
二〇二一年一〇月二八日発行
発行者　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者　髙木清生

目次

大峰山出土銭弘俶塔の蛍光X線分析　奥山誠義　1
中国黄土高原地帯の新石器時代に関する新知見
―石峁遺跡の調査成果と課題―　齊藤希　4
博物館リニューアルオープン案内　編集部　8
ひとの動き　編集部　8
研修　編集部　8

大峰山出土銭弘俶塔の蛍光X線分析

奥山誠義

一．はじめに

銭弘俶塔は、インドの阿育王（アショーカ王）が八万四千塔を造塔したという故事にならって、中国の五代十国時代（一〇世紀後半）の呉越国王銭弘俶によって造られた金属製の小塔で、仏教経典を納めた法舎利塔である（飛鳥資料館二〇一八、服部二〇一六）。銭弘俶塔は四面から構成される塔身部と、その上部の四隅に方立と称する隅飾を付け、中央に相輪を立てる構造を持つ。塔身部は下部より基台、塔身、屋蓋と呼ばれている（図1）。日本において銭弘俶塔は破片も含めて一二点確認されている（飛鳥資料館二〇一八）。本稿に挙げる大峰山出土銭弘俶塔（以下、大峰山出土品）はそのうちの一点である。

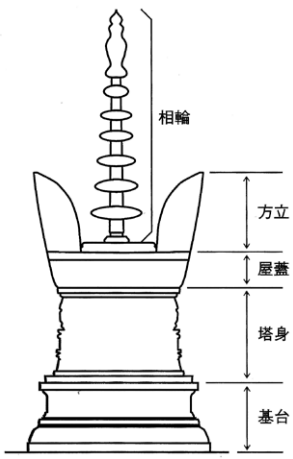


図1　銭弘俶塔の模式図
（飛鳥資料館2018から転載）

大峰山出土品は、平成一七（二〇〇五）年の大峰山寺本堂北西におけるトレンチ調査をきっかけに発見された資料（奈良県立橿原考古学研究所二〇〇六）と、同地周辺で平成一三（二〇〇一）年に表採された資料（森下二〇〇七）の二片である。大峰山出土品は、塔身部一片（以下、塔身片）と方立一片（以下、方立片）の計二片からなる（図2、図3）。

塔身片は全長九・一cmをはかり、各部品を鋳製して組み合わせるもので、四面のうちの一面にあたる。塔自身は総高二一cm前後と推定される。錆化が著しく図像は不明瞭だが、塔身上部にはカーラ、中央のアーチ型龕の内部には月光王損捨宝首譚のクライマックスの場面が表されている。龕の外側柱隅にはガルダが配される。基台上部には柱頭飾り付擬柱と禅定印の挫仏が交互に配され、基台下部は蓮華文帯が巡る（図2）と報告されている（奈良県立橿原考古学研究所二〇〇六）。

方立片は馬耳状の隅飾で、高さ四七・五㎜（本体三七㎜）をはかる。方立は外側に仏伝図を配し、内側（相輪側）に神将像を表す（森下二〇〇七）。

塔身片はほぼ全面が砂粒を巻き込んだ腐食生成物で覆われており、所々にうかがえる緑青から銅を含む製品であることを想起させた。一方、方立片は、全体が緑青で覆われ、黒色ないし淡緑灰色を呈していた。

本稿では、大峰山出土品について表面分析による材質調査を実施したので、その結果を報告する。

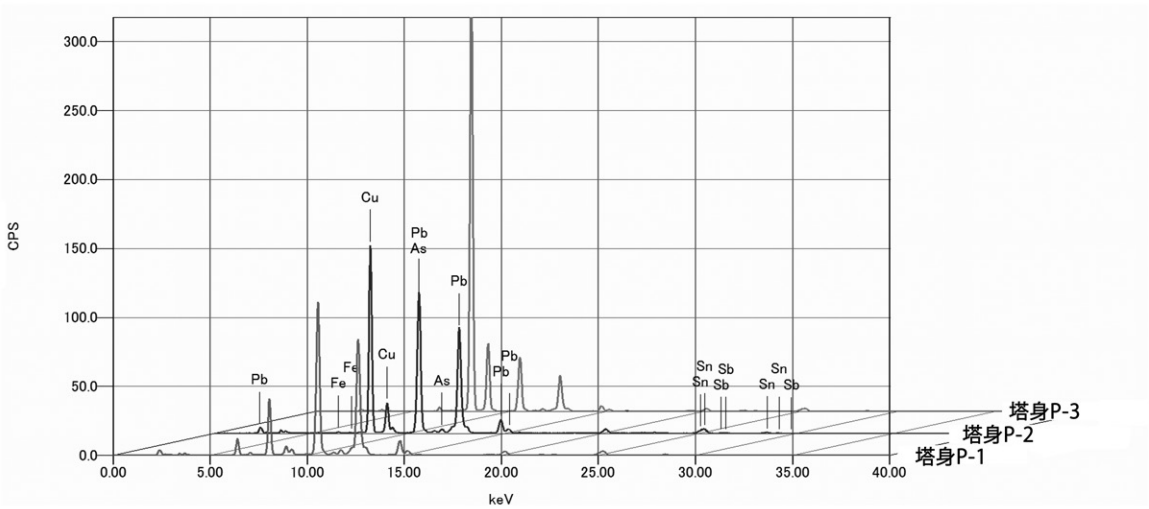
二．調査の方法

調査対象は、先述の通り、大峰山出土銭弘俶塔片二点である。観察の後、蛍光X線分析を実施した。

蛍光X線分析法は、試料にX線を照射した時に発生する蛍光X線のエネルギー及び強度から、試料に含まれる元素を特定する手法である。物質を構成する最小単位である原子は、原子核とその周囲を周回する電子により構成されている。原子にX線を照射すると、内殻にある電子が励起されて殻外にはじき出され、空孔ができる。この空孔に外殻の電子が遷移することで原子は安定する。この時に生じるエネルギーの差が蛍光X線として放出される。原子の持つエネルギーは固有であるため、蛍光X

図３　大峰山出土銭弘俶塔の方立片

図２　大峰山出土銭弘俶塔の塔身片（左は透過Ｘ線画像）



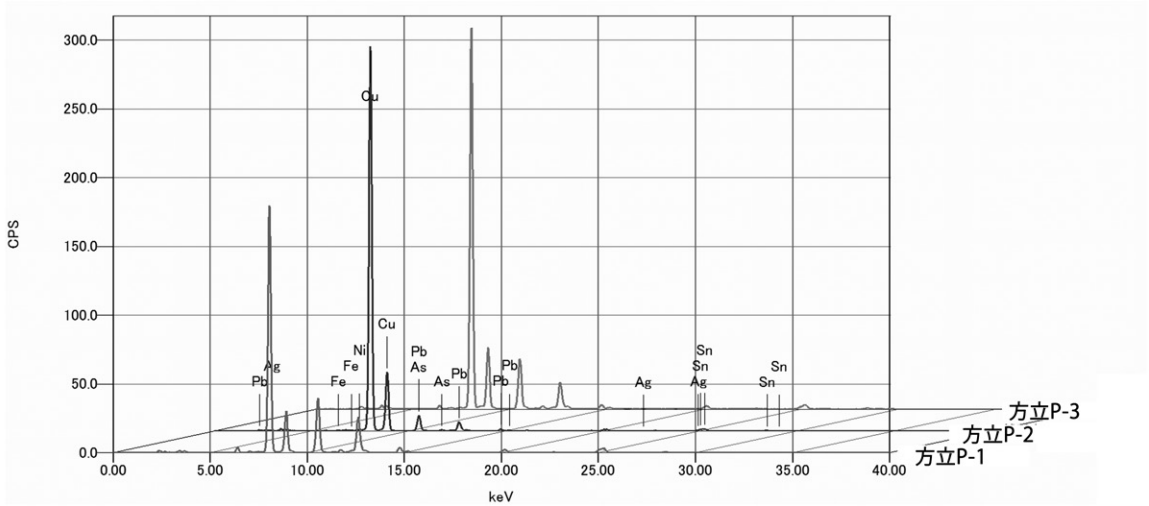


図４　大峰山出土銭弘俶塔の蛍光Ｘ線スペクトル（測定点全箇所）

線エネルギーも原子により異なる。したがって、蛍光X線のスペクトルを測定することにより物質に含まれる元素の種類を特定でき、強度からその含有量を求めることができる。

蛍光X線分析には日本電子社製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-三一〇〇RⅡを用い、非破壊による測定を実施した。この装置のX線源はロジウム（Rh）である。測定にあたっては、X線を発生させるための管電圧を五〇kV（管電流は自動調整）、照射径を一㎜とし、大気雰囲気下で一〇〇秒間測定を行った。本装置は、ファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による元素含有量の自動算出が可能である。FP法は一次X線のスペクトル分布や質量吸収計数、蛍光収率といった物理定数から理論的に元素含有量を計算する方法で、検出された全元素含有量の合計が一〇〇%となるように自動計算される。今回の分析は非破壊による表面分析であり、対象とする資料の表面状態も一様ではないため、形状的な測定条件が成分組成に大きく影響すると考えられる。したがって、算出された元素含有量は参考値として示すこととする。

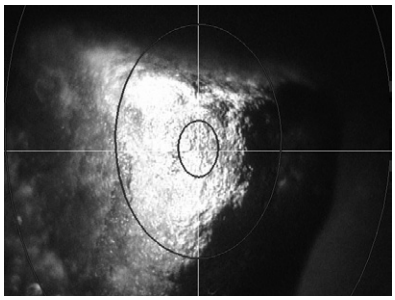


図５　測定箇所の一例
（塔身片基台P－２部分）

表１　大峰山出土銭弘俶塔の蛍光X線分析の結果　※FP法による元素含有量（Wt%）

	Wt %						
	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb
塔身　P-1	5.29	12.34	6.30	0.53	8.14	0.53	65.50
塔身　P-2	0.27	32.37	5.10	ー	6.83	0.59	54.84
塔身　P-3	0.59	67.95	3.68	0.78	3.82	0.55	22.63
方立　P-1	1.25	50.17	4.40	0.28	7.66	0.61	24.81
方立　P-2	0.12	84.18	2.31	0.23	3.64	ー	9.19
方立　P-3	0.57	67.14	5.74	0.46	6.08	0.89	18.83

測定箇所は、塔身片三カ所（屋蓋一カ所、基台二カ所）と方立三カ所の計六カ所である。

塔身片はすべて裏面で、基台裾部両端各一カ所ずつ（表1中の塔身P-1及びP-2）と屋蓋の中央上部（表1中の塔身P-3）の計三カ所である。屋蓋の中央上部は若干黄褐色を帯びたなめらかな面を呈していた。基台裾両端部はいずれも緑青色で、微細な凹凸を有するポーラスな状態を呈していた。なお、概報によれば、塔身片の一部に鍍金が残るとされているが（奈良県立橿原考古学研究所二〇〇六）、本分析に伴う観察では鍍金を確認できなかった。

方立は塔身片に比較して金属質の遺存状態が良好で、全体にオリジナルと思われる金属が確認できた。測定箇所は、内側（相輪側）の仏像の頭頂部一カ所（表1中の方立P-1）、外側の二面の仏伝図が合わさり角を成す部分一カ所（表1中の方立P-2）、屋蓋との接合部分の外側一カ所（表1中の方立P-3）の計三カ所である。測定箇所の一例を図5に示した。

三．結　果

分析の結果、塔身・方立ともにCu（銅）、Sn（錫）、Pb（鉛）を多く含んでいることがわかった（表1、図4）。また、As（ヒ素）もわずかに検出している。ごくわずかながらAg（銀）とSb（アンチモン）のピークも確認された。

塔身片においては、Pbの含有量が五〇wt%を超える箇所が複数見られ、Cuよりも顕著に検出する箇所が確認された。一方、方立においては、Cuを顕著に検出する傾向を示した。主要成分と考えられるCu、Sn、Pbの含有量は、破片や測定箇所によって異なり一様ではないことが明らかになった。これは、測定箇所の凹凸や腐食生成物に起因すると考えられる。したがって、本分析結果から、二片の金属組成を把握するため、単純に分析値の平均を取るなどの処理は行えないものと考えられる。

各所の組成を総合的に判断すると、大峰山出土品の方立片・塔身片はいずれもCu、Sn、Pbを主成分とする青銅製であると考えられる。ただし、先述の通り、正確にこれらの成分の割合を示すことは困難である。本分析資料二片は表面状態に差違があり、分析結果を単純に比較できないが、主要成分等の検討から二資料は一体を成していたものと推定される。一

方、本分析の対象とした塔身片については、一部に鍍金が残されているとの報告が成されているが（奈良県立橿原考古学研究所二〇〇六）、本分析においては、鍍金の根拠となるAu（金）、Hg（水銀）等は検出されておらず、本分析結果から、鍍金の有無を確定することはできなかった。

四、まとめ

本分析では、大峰山寺本堂付近より発見された銭弘俶塔の破片（塔身・方立）を蛍光X線分析したところ、いずれもCu、Sn、Pbを主成分とする青銅製である可能性を示唆する結果が得られた。

銭弘俶塔については、西田紀子らを中心とした研究グループにより国内所蔵品の蛍光X線分析がおこなわれている（飛鳥資料館二〇一八）。本稿執筆時点では結果は公表されていないものの、いずれ公表されるとのことである。本分析結果が国内で確認されている銭弘俶塔との比較検討の材料となれば幸いである。

本稿執筆に当たり、調査報告にご快諾いただいた宗教法人大峰山寺様にはここに記して御礼申し上げます。

【参考文献】

飛鳥資料館二〇一八『日本所在銭弘俶八万四千塔の調査一』飛鳥資料館研究図録第二一冊

奈良県立橿原考古学研究所二〇〇六「史跡大峰山寺境内二〇〇五」『奈良県遺跡調査概報二〇〇五年度　第二分冊』

服部敦子二〇一六「銭弘俶八万四千塔の造立と信仰」『祈りをこめた小塔』飛鳥資料館図録第六五冊

森下惠介二〇〇七「金峯山上の銭弘俶塔」『日中交流の考古学』同成社

中国黄土高原地帯の新石器時代に関する新知見
—石峁遺跡の調査成果と課題—

齊藤　希

一、はじめに

陝西省神木県に所在する石峁（シーマオ）遺跡は、以前からその存在は知られていたものの、本格的な考古学的調査が開始された二〇一一年以降、非常に目覚ましい発見が相次ぎ、瞬く間に注目を集めることとなった。二〇一二年には、中国十大考古発見の一つに選ばれ、さらに翌年には世界重大田野考古発見にも選出された。一方で、中国考古学に関わる研究者を除くと、日本国内での知名度は比較的低い。中国黄河上・中流域の黄土高原地帯という日本列島からは離れた地での調査であるため、なじみがないと感じる方も多いかもしれない。しかし、ここでの発見は東アジア全体の歴史を考える上でも重要であり、いわゆる国家形成段階の社会をどのようにとらえるかという意味でも非常に面白い事例と考えられるため、簡単にではあるが本稿で紹介する。

二、石峁遺跡の概要

石峁遺跡は、黄河の支流である禿尾河とその支流の洞川溝が交わる付近に所在し、海抜一一〇〇～一三〇〇mの丘陵上にある（図1）。一九二〇年代後半には既にこの地域出土とされる玉器が知られており、一九七六年以降には数回にわたり現地での踏査がおこなわれ、石器や玉器、土器などが採集された。一九八一年にははじめての発掘調査が実施され、大量の玉器や石像などが注目された。一方で、遺跡規模や時期、文化背景などの問題が依然として残っていた。そこで、二〇一一年から陝西省考古研究院を中心とした発掘隊が組織され、本格的な発掘調査や分布調査が進められた（陝西省考古研究院ほか二〇一三）。

石峁遺跡の主要部分は城址であり、「皇城台」と呼ばれる台状の施設を中心として、石垣で囲まれた内城、さらにその東南側を広く取り囲む外城、という三部分で構成されている（図2）。皇城台は山を削りだして方形に近い高まりを造り、外周に石を階段状に積み上げて覆うようにして構築されている。外城までを含めた総面積は四〇〇万㎡に及ぶ。皇城台や内・外城の石垣には、城門・櫓・馬面などの遺構がある。特に、二〇一二年から発掘調査がおこなわれた外城東門址では、非常に複雑な構造を持つ城門遺構が発見された。遺跡内からは住居址や犠牲坑・壁画・玉器・瓦などが見つかっている。

遺跡の性格について、発掘報告では「龍山晩期から夏代早期の時期に営まれた超大型中心集落」、「当時の北方文化圏の核心的地位にあった集落」と判断されている。一方で、城内は縦横無尽に走る谷筋によって居

住には適さない地勢であることから、城は一種の特殊な建築で、例えば戦争の際の短期的防御施設だったと推察する研究者もいる（《考古与文物》編輯部二〇一三）。

石峁遺跡の遺構・遺物の年代に関しては現在も様々な意見があるものの、陝西省考古研究院ほか調査機関の見解としては、前期と後期の二時期があり、前期を紀元前二三〇〇～二一〇〇年、後期を紀元前二一〇〇～一八〇〇年としている。中国で一般的な時期名称でいえば、龍山文化晩期から二里頭文化早期に相当する。ただし、二里頭遺跡の最新の研究成果によると、二里頭文化早期（一期・二期）は紀元前一七五〇～一六一〇年、二里頭文化晩期（三期・四期）は紀元前一六一〇～一五二〇年とされている（中国社会科学院考古研究所二〇一四）。このため、石峁遺跡と二里頭遺跡の絶対年代と時期表記には若干の齟齬が生じている。今後さらに放射性炭素年代測定や土器の編年研究が進んだ段階で、両者の齟齬は修正されていく可能性がある。

石峁遺跡に関する考古学的研究で重要な成果は多方面に及ぶが、今回は一部の成果とそれらに関する諸問題を述べていくこととする。

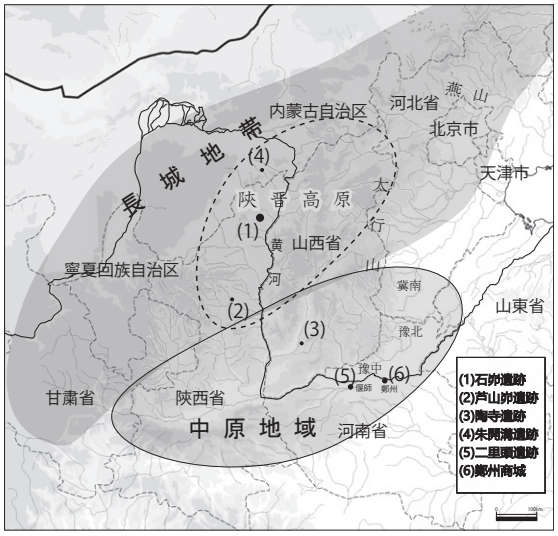


図１　中国黄河上・中流域における石峁遺跡の位置（筆者作成）

図２　石峁遺跡全体平面図（陝西省考古研究院2017）

三、石峁遺跡の調査成果と諸問題

①城郭構造の起源と系譜

「城郭」とは、内城と外郭（外城）の城壁配置を持つ構造を示す（張国碩ほか二〇一四）。基本的には内城が最高統治者の安全を保障する施設、外郭が一般居住民の生命を守るための機能を持つ。二里頭遺跡は、面積三〇〇万㎡以上の大規模遺跡であるが、内城と外郭はなく、自然の障壁が一定程度の防御機能を持つのみである。続く商代になると、鄭州商城、偃師商城、洹北商城など多数の城郭を持つ遺跡が出現する。さかのぼって新石器時代末期の事例を紹介すると、江蘇省連雲港藤花落（内外城含めて面積一八万㎡）、四川省新津宝墩城址（内外城含めて二六八万㎡）、山西省襄汾陶寺遺跡（大城二八〇万㎡）などが挙げられる。石峁遺跡は前後の時期の城郭と比較しても、最大級の規模を有することが分かる。加えて、外城東門址はその後の城郭都市にもみられるような複雑な構造で高い防御機能を持っていたと考えられる（図３）。石峁遺跡の中心的施設である皇城台にも、防御のための複雑な構造を持つ門址がある（図４）。このような複雑な構造は城郭研究にとって重大な発見といえる。

なお、石積みの城壁そのものは、新石器時代末期の内蒙古自治区内で既に散見され、黄土高原地帯の中で系譜をたどることができる。しかし、石峁遺跡では石壁内に木の柱があり、より頑丈な構造になるよう工夫されている点や、壁画が存在する点などで違いがある。

②多様な文化要素の混在

石峁遺跡でみられる遺構・遺物は、周辺の様々な文化要素との類似性を

持ち、地域間交流の活発さがうかがえる。

まず、土器様式としては内蒙古中南部から陝西北部、山西中北部を中心に類似性が高い。これは「鬲」という内部が空洞の三足が付いた土器（図5-1・2）を代表とする、いくつかの器種セットがこの地域全体に分布しており、その型式的変化が共通することからも明らかとなっている（齊藤二〇一四ほか）。

玉器については、石家河文化などの長江中流域からの影響が指摘されている。例えば、岡村秀典は、玉鷹紋笄と玉虎頭（図5-9・11）について、石家河文化後期につくられ、そこから中原を経由して石峁までもたらされたもの、という見解を提示している（岡村一九九九）。

彩絵土器は、山西省南部（晋南）の陶寺遺跡の副葬土器との類似性が高い（図5-3～5）。

さらに、石峁遺跡では、石に人の顔や体、紋様を刻んだ石人像も出土している（図5-6）。これらは紀元前二五〇〇～一七〇〇年頃にシベリア南部に栄えた青銅器文化である、オクネフ文化の石人像（図5-7）との類似性が指摘されている（郭物二〇一三）。一方で、紀元前二五〇〇～一五〇〇頃に新疆に栄えた切木尓切克（Chemurchek）文化とも類似する。直接の伝播元は明らかではないが、西北からの影響によることは確かであろう。

このように石峁遺跡は、土器に代表される日常的なモノについては基本的に在地の系譜を持つ一方、玉器や彩絵土器、石人像など非日常的なモノは、周辺の様々な地域からの影響を反映している。

③立地と生活様式

遺跡が位置するのは山上であり、現代においてもここでの生活は非常に不便である。最大一〇〇mの高低差を行き来して河川の水を得るのも大変であり、なぜ当時の人々はこのような場所に集落をつくったのか、疑問が生じる。

李伯謙は、現在の環境からはこのような巨大な城市が出現したとは信じがたいため、環境変化についての研究が重要であると指摘している（《考古与文物》編輯部二〇一三）。遺跡が位置する陝晋高原は、「農牧交錯地帯」と呼ばれており、農耕文化と牧畜文化とが交錯する地理的条件が、このような石積みの城郭の出現につながった可能性もある。しかしながら、趙志軍によると、出土した植物遺存体はアワとキビが主体であることから、農耕がおこなわれていたことは確実である（《考古与文物》編輯部二〇一三）。

これまでの研究では、内蒙古自治区朱開溝遺跡においてヒツジ骨の比率の増加が認められるように、青銅器時代初期に生業の中での牧畜の比重が高まったとされている（内蒙古自治区文物考古研究所ほか編二〇〇〇）。逆に言えば、それまで陝晋高原でも農耕が主たる生業であったと言える。しかしながら、このような地形条件の中では農耕以外に狩猟や採集なども合わせた、多角的な食糧獲得戦略を持っていたとみるのが自然だろう。今後の植物・動物遺存体に関するデータ、および出土石器の報告を待って、検討をおこないたい課題である。

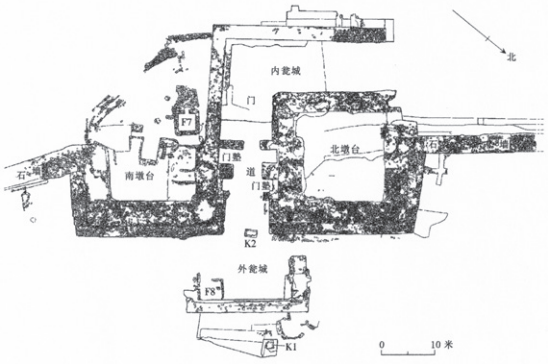


図3　外城東門址平面図（陝西省考古研究院ほか2015）

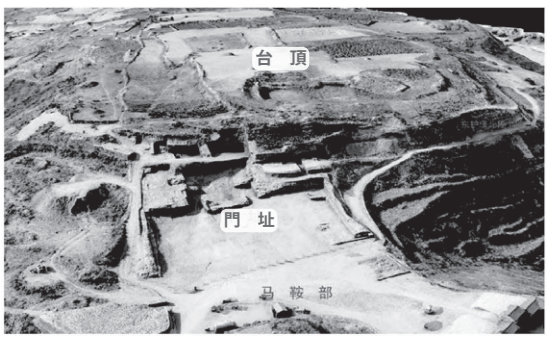


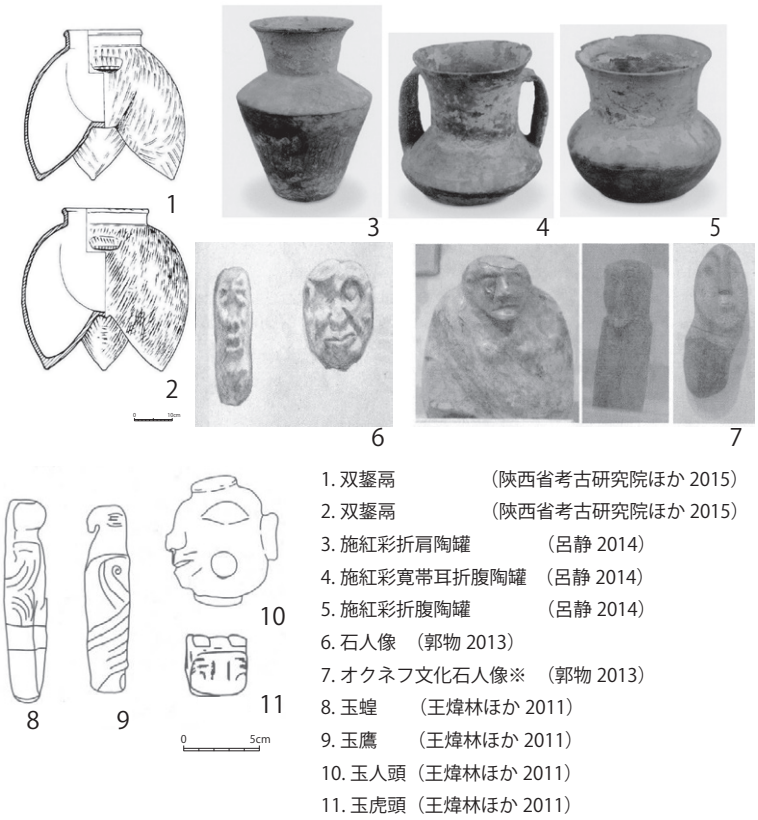
図4　皇城台東部遠景（陝西省考古研究院ほか2017）

④中原地域と北方地域の関係

かつては、「中原一元論」として、中国の発展は中原地域にはじまり、いわゆる夏王朝や殷・周の歴代王朝が盛衰し、中原の先進的な技術や文化がその周辺地域の文化へと影響を及ぼしたという見方があった。その後、様々な地方での調査・研究が進展したことで、文化発展は多元的であり、相互に影響しあうことで融合・

変容が進んだという見方が一般的となった。しかしながら、それでも城郭や宮殿・都城の出現や階層的な社会組織の出現など、国家あるいは王朝の諸条件になるような要素は、やはり中原地域で先行したとみる研究者は多かった。ところが、近年の石峁遺跡をはじめとした周辺地域、特に中国北方地域での新たな調査によって、中原地域から周辺へ、という文化的影響では捉えられない状況が多く見えてきたといえる。

河南省を中心に成立した青銅器時代初期の文化である二里頭文化では、青銅容器の鋳造や大型建物の出現、階層的な墓制、華美な装飾品など、新石器時代末期からの変化が顕著に表れる。その高い技術や社会の複雑性は、同時期の周辺の地域とはまったく異質で、研究者によっては「初期国家」段階とみる場合もある（許宏二〇〇六）。石峁遺跡においてみられる、長江流域などの遠隔地を含めた多様な地域の文化要素が混ざり合った状況は、この二里頭文化における状況に通じるものがある。社会変化と文化要素の混在・融合との間にどのような相関関係があるのか。このような普遍的な問いに関して、石峁遺跡や二里頭文化の研究が一つの手がかりになるかもしれない。



1. 双鋬鬲　（陝西省考古研究院ほか 2015）
2. 双鋬鬲　（陝西省考古研究院ほか 2015）
3. 施紅彩折肩陶罐　（呂静 2014）
4. 施紅彩寛帯耳折腹陶罐　（呂静 2014）
5. 施紅彩折腹陶罐　（呂静 2014）
6. 石人像　（郭物 2013）
7. オクネフ文化石人像※　（郭物 2013）
8. 玉蝗　（王煒林ほか 2011）
9. 玉鷹　（王煒林ほか 2011）
10. 玉人頭（王煒林ほか 2011）
11. 玉虎頭（王煒林ほか 2011）

図５　石峁遺跡出土遺物の一例と関連資料

四、おわりに

今回は、二〇一一年以降の発掘調査が進む中、国内外で注目されている石峁遺跡について、簡単な概要と関連する考古学的研究上の諸問題を紹介した。石峁遺跡の発見をきっかけに、従来の認識ではいわば「辺境」であった陝晋高原に大規模な城郭構造を持つ集落遺跡が存在したことが明らかになった。その土器様式は陝晋高原から内蒙古中南部にかけての地域と共通しており、在地の土器文化の系譜に連なるが、玉器や石人像、石のレリーフ紋様、彩絵土器など、周辺の様々な文化要素が混ざり合って共存している現象も見られる。これらの成果をふまえて、我々は従来の中原と周辺地域との関係や初期王朝形成期の歴史観を再考するべき局面にある。石峁遺跡の調査を皮切りに、芦山峁遺跡（陝西省考古研究院ほか二〇一九）など、陝晋高原での新石器時代末期の遺跡の調査が相次いでおり、大規模集落とみられる遺跡も増加している。今後は、石峁遺跡とそれらの遺跡を含めた集落間ネットワークが存在していたのか否かについても検討する必要があり、研究課題の尽きない、非常に興味深い地域といえるだろう。

二〇一六年と二〇一九年には幸運にも石峁遺跡を訪れる機会があり、遺跡での発掘調査の様子や保存・展示のあり方を実際に見学することができた。発掘調査と並行して、一般に遺跡を公開する施設がすでに運営されていたことや、体育館ほどの大きさの覆屋で調査区全体を覆い、天候や日照に左右されない調査方法を実施していたことなど、日本との違いとスケールの大きさに驚かされた

記憶がある。一方で、城郭の石積みの崩落や塩害なども生じており、今後の遺跡保存の方法について担当者が方針決定や対応策に苦慮している現状も教えていただいた。

現在は海外との往来が難しい時勢であるが、近いうちに考古学と保存科学の両分野で共同研究をおこなえるような未来が来ることを期待したい。

【参考文献】

内蒙古自治区文物考古研究所ほか編二〇〇〇『朱開溝―青銅時代早期遺址発掘報告』文物出版社

王煒林ほか二〇一一「石峁玉器的年代及相関問題」『考古与文物』二〇一一年第四期

岡村秀典一九九九「龍山文化後期における玉器のひろがり：陝北出土玉器を中心に」『史林』八二（二）

郭物二〇一三「从石峁遺址的石人看龍山時代中国北方同欧亜草原的交流」『中国文物報』二〇一三年八月二日〇〇六版

《考古与文物》編輯部二〇一三「神木石峁遺址座談会紀要」『考古与文物』二〇一三年第三期

許宏二〇〇六「二里頭遺跡から見た華夏初期国家の特質」田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論―プロセス・モデル・アイデンティティ』すいれん舎

許宏二〇一九「関于石峁遺存年代等問題的学術史視察」『中原文物』二〇一九年第一期

齊藤希二〇一四「新石器時代後期から青銅器時代初期の中原北方地域における地域間交流―空三足器の分析を中心に―」『中国考古学』第一四号

陝西省考古研究院ほか二〇一三「陝西神木県石峁遺址」『考古』二〇一三年第七期

陝西省考古研究院ほか二〇一五「陝西神木県石峁遺址后陽湾、呼家洼地点試掘簡報」『考古』二〇一五年第五期

陝西省考古研究院ほか二〇一七「陝西神木県石峁城址皇城台地点」『考古』二〇一七年第七期

陝西省考古研究院ほか二〇一九「陝西延安市芦山峁新石器時代遺址」『考古』二〇一九年第七期

中国社会科学院考古研究所二〇一四『二里頭（一九九九－二〇〇六）』文物出版社

張国碩ほか二〇一四「史前夏商城址城郭之制分析」『中原文物』二〇一四年第六期

呂静二〇一四『陝北史城研究』文物出版社

博物館リニューアルオープン案内

平成三〇（二〇一八）年一二月末から休館していましたが、来る一一月三日に約三年ぶりに再開館します。常設展示は「大和の考古学」を踏襲していますが、展示ケース、演示台、照明、展示パネルなどを改め、最新の発掘調査成果も反映させました。観音寺本馬遺跡の土偶、ホケノ山古墳や黒塚古墳などの前期古墳の遺物群、法隆寺金堂壁画・高松塚古墳壁画の複製陶板など、新たな仲間たちをぜひ見に来てください。

【一一月三日（水・文化の日）】

一〇時一般観覧者入館開始

一八時まで開館延長（入館は一七時三〇分まで）

当日入館無料〔一一月一三日（土）、一四日（日）も入館無料〕

【一一月四日（木）以降】

九時開館　一七時閉館（入館は一六時三〇分まで）

休館日　月曜日（祝日の場合は火曜日）、年末年始（一二月二八日～一月四日）、臨時休館日（博物館の指定する日）

ひとの動き

（所内異動　令和三年六月一日付）

高橋幸治　調査部調査課調査第一係指導研究員

→企画学芸部学芸課学芸係指導研究員

（退職　令和三年七月三一日付）

木村結香　調査部調査課調査第二係主任技師

→志木市教育委員会生涯学習課

（転出　令和三年一〇月一日付）

西村由紀子　総務課主任主査

→中南和県税事務所主任主査

（新規採用　令和三年一〇月一日付）

小倉頌子　企画学芸部資料課資料係技師

研修

三郷町からの依頼により、同町環境整備部ものづくり振興課埋蔵文化財技師の孕石貴也氏が、六月一日から九月三〇日まで当研究所調査課で研修されました。

三郷町でのご活躍を祈念しております。